

上総国防人歌と大原真人今城の關係

町 方 和 夫

一、上総国防人歌の發想

「天平勝宝七歳乙未二月相替遣^二筑紫^一諸国防人等歌」の題詞のもとに集合せしめられた歌群を中軸とした卷二十の防人歌の中には他の卷・古代歌謡・防人歌歌群の中に類似歌を求めうる歌が十首ほどある。なかでも、遠江国四三二三番、常陸国四三六八番、昔年の四四三六番はそれぞれ書紀（孝徳紀）一一四番、卷九・一六六八番、卷十七・三八九七番に帰結しうる類似歌である。また、武蔵国四四二二番は昔年防人歌に重出とみなしうるほどの形であらわれてゐる。この類似性は偶然にあらわれたものか、それとも何かの作用に基づくものか、作用であるとすれば、どんな作用であらうかを解くために二本の柱を設定した。吉野裕氏のいう「集團的歌謡の場」で、

一つは、伝誦され少くともある程度人口に膾炙していたと思われる歌の歌句が既にある時期に非意志的に詠者の心情に吸収されて、作歌の際にそれらの歌句が発想の源徳となつて志向的に表現されたと推定しうる類似性の歌群を浸透性歌類とし、家持箇に属する人々、あるいは人々の歌ないしは歌句に作歌上の指導的影響を直接的に何らかの形で受容して結実したと思われる類似性の歌群を指導性歌類として諸国の防人歌を類別してみると、上総国防人歌が他の諸国に比して指導性歌類に属すると思われる歌が最も多く、浸透性歌類に属すると推定しうる歌はわずかに二首であつた。^{注(一)}これは収録率六八・四%の高率とも關係あり、何人かの指導性が作用していると考えられる。

この国の防人歌十三首中十一首が指導性歌類に属すると見るので

あるが、指導性を求められた発想の源は卷十五(八首)、卷十七(二首)、卷十九(二首)であり、家持の歌である。^{注2)}卷十五は天平八年丙子夏遣使新羅國之時使人各悲別贈答及海路之上勸旅陳思作歌并当所誦詠古歌と中臣朝臣宅守娶藏部女婦狭野茅上娘子之時勸斷流罪配越前國也於是夫婦相嘆易別離會各陳情贈答歌の兩歌群である。以下、この指導性歌類について考察してみたい。(一部省略)

- (1) たらちねの母を別れてまこと我旅の飯廬に安く寝むかも (四三三八番)
 - (2) 百戦の道は来にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ (四三四九番)
 - (3) 旅衣八重著重ねて寝のれどもなほ府寒し妹にしあらねば (四三五一番)
 - (4) 家風は日に日に吹けど吾妹子が家言持ちて来る人もなし (四三三三番)
 - (5) 外にのみ見てや渡らも難波瀧雲居に見ゆる島ならなくに (四三五五番)
- について見ると、卷十五所収の次の歌に指導性を求めているとみてよいと思う。
- (4) 大伴の御津に船乗り傍ぎ出てはいづれの島に慮せむ我 (三五九三番)
 - (4) 恋繁み感めかねて茅蟬の鳴く島陰に慮するかも (三六二〇番)
 - (4) 海原を八十島隠り来ぬれども奈良の都は忘れかねつも (三五九二番)
 - (4) 妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける (三五九二番)
 - (4) 秋風は日に日に吹きぬ吾妹子は何時とか我をいはひ待つらむ (三五九二番)

持と交渉のある人物によって防人歌に採用されたものだろう。(4)の作者はその点に着眼して、指導性を求めたのではあるまいか。(5)は(4)の「淡路島雲居に見えぬ」を念頭において作歌したもので(5)の「島」は淡路島である。歌意としては(4)が帰途時の欣喜が「早見む」にうかがえるのであるが、(5)は壯途につく準備中(待機中)の「渡らも」であって、庶民の吐きすてるような自棄が「外にのみ見てや……島ならなくに」に表現されているといえよう。

- (6) 庭中の阿須波の神に木柴さし吾は斎はむ帰り来までに (四三五〇番)
 - (7) 芦垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思ほゆ (四三五七番)
- についてみると、
- (4) 春日野に斎く三諸の梅の花柴えてあり待て還り来るまで (一九・四二四二番、清河)
 - (4) 葦垣の外にも君が倚り立し恋ひけれこそは夢に見えけれ (一七・三九七七番、家持)

の二首が発想の源となつて指導性を示しているのではないかと思う。(6)は勝宝四年閏三月に節刀を給わった大使正四位下藤原朝臣清河の歌である。(7)の一群の歌は越中大目高安倉人種麻呂の伝説である。家持は「聞きし時のまにま、ここに戦す。」と左注にのべているので、これもやはり家持の歌と見る。(6)はこの(7)の梅の花の榮える姿を期待して長途につく大使の心情をおのが身にひきうつして木柴をさし継ぎにして木柴の榮える姿に自己の無事息災を期待したものである。(7)は(6)を女性の歌と見做したものであろう。「君が倚り立し恋ひけれこそ」は男性性に対してのうたいあげと誰しもが受

(4) 吾妹子を行きて早見む淡路島雲居に見えぬ家づくらしも (三七二〇番)

これらが発想の源となつて見るとよい。すなわち、(1)は「旅の飯廬に安く寝むかも」を(4)「いづれの島に慮せむ」(4)「島陰に慮するかも」に求め、母との別離の不安を「飯廬」に托している。「御津に船乗り傍ぎ出ては」は常陸、下総等の國においても参考にされたのではなからうか。(2)は(4)の「八十島隠り来ぬれども……忘れかねつも」をあきらかに発想の源とされたもので、(4)が八十島を通じてきたというのに対して(2)は百戦の道を経て更に八十島を通じて行く作者の心情を訴えている。(4)の指導的役割の状況の中にあつてこそ(2)は強く訴えてくるものを持つ。一種反発的ときえうけられる歌意で防人の苦衷が表現されている。(3)は(4)の「別れては衣手寒き」に対して「八重著重ねて……なほ府寒し」とうたいあげ、防人として旅立つ庶民の悲哀をいよいよ盛りあげている。(2)と(3)は歌の構造の面では、素材は異なるが志向的な共通性を持っている。(4)は(4)の「日に日に吹く」をそのまま踏襲して、「秋風」を「家風」とすると同時に「いはひ待つ」を「家言持ちて来る」と具体的な生活表現に改変することによって望郷への積極的な心情を吐露した歌といえよう。この歌は、また「山吹は日に日に咲きぬ愛しと我が念ふ君はしくしく念ほゆ」(一七・三九七四、池主)の歌にも発想の源として指導性を求めているのではなからうか。「日に日に」の歌句は右のほかに集中九例ある。卷八、十七の用例は家持の使用であるが、他は作者未詳歌である。これは、伝説性の流行語であつた「日に日に」が家持・池主に歌語として使用されるようになり、家

けとるだろう。刑部直千國は卷十四、三四六〇番に基く連想から女性側の歌と考へて、発想の源とし指導性を求めたのではなからうか。(7)の「隈処に立ちて吾妹子が」は(4)の「外にも君が倚り立し」と好ましい相聞風の対応関係をなしているといえよう。

このように作歌事情を説明してくると、(上総国防人歌の浸透性歌類については、四三五二番↓二七七〇番、四三四七番↓三五六八番と考へられる。)指導性歌類は家持の歌にすべて指導性を求めている関係から、何人かによって家持の歌が防人の世界にもたらされたことになる。卷十五、遣新羅國使人の歌群が大伴の三中の旅籠中にあつた^{注3)}とすると、一層その感を深くする。ともあれ、家持園内にあつて、伝説性歌謡、短歌に精通し、作歌にあつて指導力、影響力等を具備した人物は誰であらうかを考えると、卷二十にしばしば登場する伝説歌人大原今城に注目させられる。

二、大原真人今城の姿勢

筆者は四四三九番左注の「大原真人今城伝へ誦みて云へり。」とある点に注目したい、といつたことがある。^{注4)}いま、この上総国防人歌と大原真人今城の關係について歌の姿勢の面から論及してみたい。昔年相替りし防人の歌一首

- (8) 闇の夜の行く先知らず行く吾を何時来まきむと問ひし見らほも (四四三六番)
- 右の件の四首(四四三六、四四三九)は上総国防人歌正六位上大原真人今城伝へ誦みて云へり^{注4)}年月いまだ詳ならず
- についてみると、
- 天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿大納言に任せらえ^{注5)}來ぬ

ること、京に上りし時、僂徒等の、別に海路を取りて京に上り
 の如し、
 ……(以下略)

(伊)大海の奥処も知らず行く我を何時来まきむと問ひし児らはも
 右の九首(三八九一〜三八九七)は作者姓名を密にせず。
 を発想の源とす類似歌といえる。しかし、(伊)が天平二年十一月
 上京時に作歌されたものかどうか疑わしい。むしろ否定すべきであ
 る。というのは、この歌群十首中作者名を記載した歌は最初の三
 野連石守作(三八九〇番)のみで、以下は右に記すように「右九首
 作者不審姓名」歌である。題詞中に「別に海路を取りて」とあると
 ころから、大宰帥大伴卿とは別行動をとった従者たちの歌唱した歌
 が一括されて家持以外の家持の何人かに保管されていたものであ
 る。当時、作歌されたものであれば、三八九〇番に次ぐ位置に置
 かれたであろうし、作者名も記録されたにちがいない。そうでないこ
 とは、この九首がすでに伝誦歌として歌唱されていたことになる。
 (8)と(伊)の間には記録上は二十五年以上の隔りがあるのだが、家持は
 いかなる理由で(伊)について左注も付記せず、今新しく今城伝誦とし
 て収録したのだろうか。多分、(8)は(伊)を発想の源として作歌指導
 されたもので、収録に至る注記の状況から考えると今城保管である
 う。(6)(7)にしても(伊)との関係を考えると、家持以外の何人かに保
 管されていたものに指導されていることを示す。これも今城の指導
 だろう。

そこで、今城関係の歌を集中に求めると三十一首になる。今城の
 母(五一九)、後人追同歌(五二〇)高田女王御今城王(五三七)〜
 五四二(以上巻四、八首。今城伝誦(四四三六〜四四三九、四四五
 九、四四七七)四四八〇、四四八二)以上巻二十、十首。郡司妻女

平二年)を記載した詞書(稲公の歌はない)があり、巻八、一五四
 九番の詞書に衛門の大尉大伴宿禰稲公(これも歌はない)がある。
 歌としては、

衛門の大尉大伴宿禰稲公の歌一首、
 (9)時雨の雨間無くし零れば三笠山小末あまねく色づきにけり
 (8・一五五三番)

が唯一の歌である。そして、この歌には発想の源を見出すことが
 できる。
 (注6)

(伊)時雨の雨間無くし零れば真木の葉も争ひかねて色づきにけり
 (10・二一九六番)

がそれにあたる。この兩首をみた場合に、相違する箇所は(伊)が「真
 木の葉も争ひかねて」であるのに対して、(9)は「三笠山小末あまね
 く」とあって、(伊)にくらべて強烈な濃い色彩感と三笠山への愛着が
 感じられる。新古今集巻六、五八二番に収録されている(伊)は人麿作
 となつてゐる。相当の広域に伝誦されていたものと思われる。稲公
 がそれを発想の源として改変したものを(作歌指導が姉によって
 おこなわれたかも知れない)、編纂時に市原王系の歌を収録する際
 に今城が市原王系の歌と共に将来したのではなからうか。

(勝宝八年十一月二十三日、式部の少丞大伴宿禰池主の宅に集
 ひて飲宴せる歌二首(その一首)
 (初)初雪は千重に降りしけ恋ひしくの多かる吾は見つつ思はむ

(20・四四七五番)
 (高田)の尾の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや
 (20・四五〇七番)

の今城の歌二首について見ると、

等饒之歌(四四四〇、四四四一)、今城宅にて家持作(四四八一、四
 四九二、四五一五)以上巻二十、五首。今城作(二六〇四、四四四
 二、四四四四、四四七五、四四七六、四四九六、四五〇五、四五〇
 七)以上巻八、一首。巻二十、七首。△△印類似性の歌ありVさ
 らに、四五〇五について、全註釈は「古歌に学んだもの」といつて
 いるから、今城作の歌自体は五割以上が発想の源を古歌、または
 今城周辺の家持歌に求めたことになる。^(注5) 郡司の妻女の饒の歌(四
 四四〇)も上野国(四四〇七)、武蔵国(四四二一、四四二三)等
 の歌から推測すると、発想の源となる古歌があつて、作歌時に今
 城の指導が加わつたものと考へたい。

そこで、今城の官職と人間関係の面から彼が防人歌と接触する可
 能性をみる必要がある。

○天平勝宝七歳五月九日以前、上総国大椽○勝宝八年三月以前、
 兵部大丞△六年四月、家持兵部少輔となる△同日、大伴宿禰稻君上
 総守となる。△宝字元年五月、稻公正五位上となる○同日、大原真
 人今木従五位下となる○同年六月今城(治部)少輔となる△同日、
 家持兵部大輔となる△宝字二年二月、市原王治部大輔となる○宝字
 七年正月、今城左少弁○同年四月、上野守○宝字八年正月従五位上
 ○宝字二年閏三月復本位従五位上○大原櫻井真人は今城の父か○大
 伴女郎は大伴女郎(旅人の妻)と同一人らしくもある。^(注7)

これらの諸点から血縁関係の桜井王、高安王、門部王、治部大輔
 市原王の系譜安貴王、湯原王の歌を集中に求めると、巻三、四、
 六、八に多く散見されるようだ。この点に注目して、上総国大椽大
 原真人今城の上司であつたにちがいない上総守稲君(稲公と同一人
 物と考へる)の歌を求めると、巻四、五六七番に右兵軍助稲公(天

(伊)沫雪は千重に降り敷け恋ひしくのけ長き我は見つつ思はも
 (10・二三三番)

右は、柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ。

(高田)の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遯をけば
 (20・四五〇六番、家持)

の二首を発想の源として指導性を求めていることは一目瞭然である。
 二首とも相聞風の対応関係にあるとみてよいだろう。これら今
 城歌の形質、および歌に対する今城の姿勢を考えると、大伴女郎歌
 一首^(今城宇之麻呂家城王後) (4・五一九)と後人追同歌一首(4・五二
 〇)の関係において、「後人」について確証がないにしろ、右にの
 べてきた歌に対する今城の姿勢と巻四の五一三〜五四二の歌群は今
 城周辺に存在する人物の歌が多い点を根拠とすると、今城は母大伴
 女郎の歌を入手してみ、他家へ嫁いだ母を思慕する歌を添補して
 相聞風の対応関係の形をつくつたとみてよいと思つた。

三、むすび

このように今城の発想の源に指導性を求める作歌上の姿勢は、上
 総国防人歌の指導性歌類には特別な愛着と同情をもって作用した形
 今城の母という大伴女郎は稲公の同母姉でもあるから、稲公は今城
 跡が濃い。の上司であり、叔父でもある。今城は家持と異父兄弟で
 あり、大伴の家督を補佐し、親交を深めて宝色にいたつたとみられ
 る。今城は歌人としては凡で、伝誦者として非凡であつたらうが、
 なかんずく改削・収集や作歌指導の面には卓越した技術をそなえて
 いて、家持の編纂を成功させるに功績があつたと思われ。^(注9) 一方、
 稲公は宝字二年二月には既に大和国守であつたし、同年六月に家持

因幡守、万葉集卷二十が同年二月の「願目山齋作歌三首」「倭渤海大使小野田守朝臣等宴歌一首」等の宴歌歌群で草薙段階の編纂を一応終了し、以下二首の宴歌を追録したものと考えるならば、集の完成には二人の叔父としての稻公の力が大いに与っているとみてよいのではなからうか。^{注②)}

注① 吉野裕氏「防人歌の基礎構造」に「集團的歌謡の場」という。筆者のいう浸透性歌類、指導性歌類については別の機会にのべたい。武蔵国防人歌は浸透性歌類に属すると見られる歌が圧倒的に多い。

② 吉永登氏「解釈と鑑賞・万葉集ハンドブック」(昭和36年)「卷十五の遣新羅使の歌の形響があるという考えが有力である」といい、「兵部省の大輔をさえ経験した稻公が防人を供給する国の長官として、その悲惨な状態に同情した結果、廢止の前堤として家持に集めることを進めたと考えることも出来ないことはない。」とある。

③ 山田孝雄博士「万葉集考叢」所収「万葉集と大伴氏」に「私は之を三中宿禰の旅籠中に入って京に將來されたものであり、その署名の無いものの中には三中宿禰の作が少からずあると思ふ。」とある。

④ 拙稿「防人歌の位置」(国学院雜誌67卷5号)

⑤ 四四三六前出。四四四二、四四四四、四四四三、四四四二、四四四三、四四五〇、四四七八、三八〇七、四四八一、五五六、四四七五、二三三四、四五〇七、四五〇六。

⑥ 江野沢淑子氏「万葉集第十四の蒐集者」(古代文学三号)は

穂積皇子を父とする。

⑦ 「全註釈」による。

⑧ 卷四、五八六番、「大伴宿禰稻公の田村の大嬢に贈れる歌一首大伴宿禰麻呂の卿の女なり」の左注に「右の一首は姉坂上の郎女の作れる」とある。稻公は歌は不得手であったのだろう。一五五四番は「大伴家持の和ふる歌一首」である。後の添補であろう。

⑨ 中西進氏「家持の追憶——『歌日記』の形成——」文学34卷6・7号)は今城資料と家持自身の資料をもとに宝龜の家持が整備したと詳論する。

受贈雜誌

「語文」第二十三輯(昭和四十一年三月)

日本大学国文学会

「上代文学」昭和四十年第二号

上代文学会

「中央大学国文」第九号

中央大学国文学会

「文学論叢」第三十三号

東洋大学国語国文学会

「語文」第二十四輯

日本大学国文学会

「甲南国文」第十三号

甲南女子大学国文学会

「中央大学国文」第十号

中央大学国文学会

「文学論叢」第三十四号

東洋大学国文学会

「美夫君志」第九号

美夫君志会